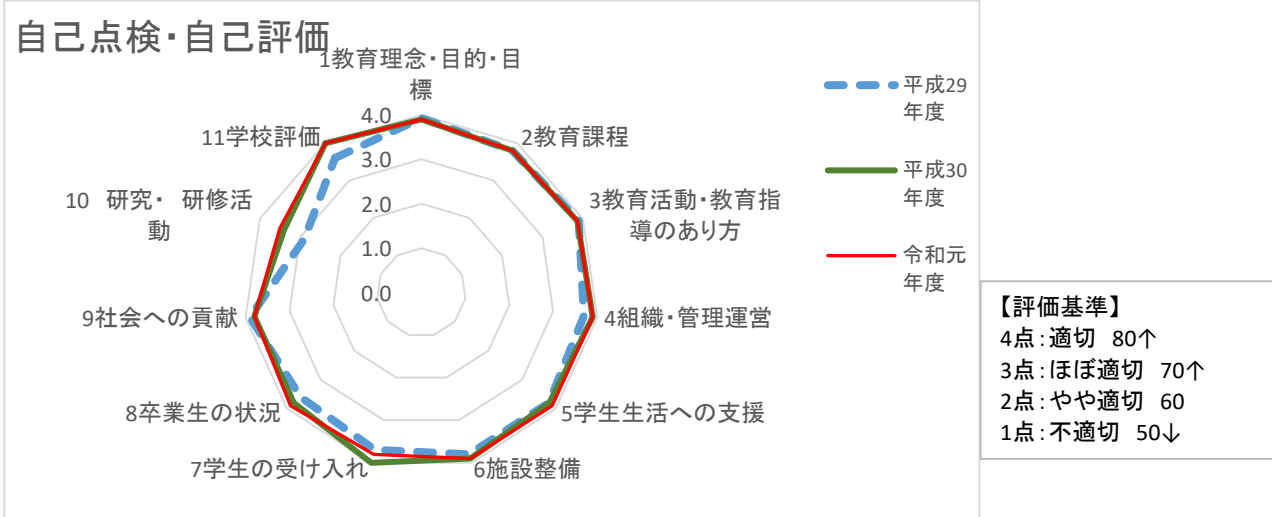


令和元年度 自己点検・自己評価 最終評価 総括

金沢医療センター附属金沢看護学校

○ 大項目 評価点平均



○ 令和元年度 大項目最終評価概要及び今後の課題

<p>1 教育理念・目的・目標 (3.9点)</p> <p>教育理念などは指定規則および国立病院機構の理念を反映している。当校noに自主自学の精神を土台に専門職性、自立性、論理性、判断力、実践力を育成することを目標にしている。この理念・目標を達成するために、特に一貫性を確保するために教員が一丸となって取り組んでいる。また教職員以外でも実習指導者会議や、講師会議等で説明し共有を図っている。学生においても学生フォーラムやオープンキャンパスなどで、他校の学生や高校生に、当校の特徴を自らアピールする機会があるため、さらに浸透するように努めていく。</p> <p>次年度も期待される卒業生像をもとに演習や実習を実施し適宜形式的に評価を行い、実践力を高めていく。そして、学生の評価をアンケートで把握していく。2022年カリキュラム改正に向け、アドミッション・カリキュラム・ディプロマの3ポリシーを明確にしていく。</p>
<p>2 教育課程 (3.8点)</p> <p>当校の特徴として国立病院機構に貢献できる学生の育成という観点から、政策医療看護論や各機構病院での特色的な看護を見学・体験し機構の役割の理解を深めている。また、災害拠点病院である母体施設での災害訓練への参加から、有事への関心、学びを深めている。科目評価を行いながら、次年度シラバスには関連科目を明示した。学習内容となる看護技術・理論・法規のマトリックスも活用し、具体的内容および学生の利用状況や理解を評価していく。</p> <p>カリキュラム改正に向けた研修会参加や新カリキュラムの特徴を確認した。今後、カリキュラム検討チームを柱にカリキュラム改正を目指す。</p>
<p>3 教育活動・教育指導のあり方 (3.9点)</p> <p>基礎看護学や教員が担当する講義は、できるだけ40人以下の授業形態で行うように努力している。学内実習や臨地実習終了後の学内実習(16時～17時)を有効に活用した時間内での指導をし、学生の自己学習時間を保証していく。教員の実習担当時間数においては各教員がどのように準備時間を活用しているのか実態調査は行われていないため、実態調査の必要性については要検討。次年度は、領域毎の教員チーム間で調整しながら、より質の高い授業(講義・演習・実習)準備時間を確保していく。</p> <p>学生が自主的に学習できるように、ガイダンスを年度初め、学期の初めに実施している。復学生には、科目履修の方法の確認、留意事項等の説明をし、効果的に学習に臨めるように学習支援を継続していく。インターネット環境の整備や物品の更新などを適宜行い、効果的な学習の習得に心がけた。卒業評価において、視聴覚教材の充実については5段階で3.1であった。</p> <p>今年度も全教員が公開授業を行い、授業評価を行った。授業評価を行うことで多方面の視点で授業を改善していくことができ、効果的であった。来年度も継続して、授業評価を行い、よりよい授業につなげていく。東海北陸グループでの学校間横断授業研究も継続しており、実施、評価を踏まえ、教育内容や教育方法の充実につなげていく。</p>
<p>4 組織・管理運営 (3.9点)</p> <p>管理状況は毎年見直し、整備している。教員・講師の確保や依頼、事務業務については、機構、母体病院職員の協力を得ながら、整備・実施している。事業計画については、組織上病院の全体計画の一部として位置づけられている。予算の執行状況に関しては適宜、病院企画課と連絡を取り合いながら進めることが出来ている。収入においては、学生総数は年度初めは定員以上であるが、休学者や途中退学等にも伴い3月末は233名、休学者4名である。中・長期目標として、学校の設置目的に合わせ、地域における当校のニードを把握しながら、学生確保が必要となる。当校の今後の方向性に関する検討会においても継続の方向性が出されたため、養成所運営の効率性、生産性の確保に取り組み、母体病院と協力していく。</p> <p>学生宿舎(平成7年建設)の老朽化が進んでおり、建物整備を行って行く必要性は避けられない。入寮生数も減少している中での適切な契約更新が必要となる。</p> <p>設備・備品を適切に取り扱いながら、現状を把握し、職員一人ひとりがよりいっそう経営感覚を身につけ、適切な予算執行にとつめられるよう取り組む必要がある。また、適切な時間管理と組織内での適切な情報共有に努め、働き方改革も考慮した環境の整備や協力体制を整える。</p>

5 学生生活への支援 (3.9点)

学生の健康管理について、継続的な支援が必要な学生を把握するだけでなく、学校医とも週2回（月・水）の相談日を活用し、密に連携を図るようにする。感染予防等についてのポスターは、学生だけではなく教員とともに作り上げていく。普段の学校生活から抗体価を意識できるように、名札に抗体価カードの携帯を継続する。

今年度より、学校内でカウンセリングが開室されているため、学生が気軽に相談しやすい環境となった。カウンセリングの予約がない日は校内放送にて意図的に学生に投げかけた。カウンセリングの場となる保健室の環境を整えていく。

自治会においては学生個人の負担が大きくなることもあり、主体的に活動することが難しくなっている。自治会活動の時間を確保するなど、教員もサポートしながら、学生がやりがいを感じ、学生から発信できるよう支援を行う。

奨学金制度は、副学校長を中心に窓口を設け、授業料減免制度に関しても学生の相談に対応していく。

学生宿舎に関しては学生だけで運営していくことは困難であるため、今後も継続して寮会議などで情報を共有する、話し合いをする場を設け、継続的な支援を実施する。

6 施設整備 (3.9点)

学校の施設については、学生の状況に合わせて整備をしている。学生の意見を取り入れ、学生ホールを整備して憩いの場を整えた。今後も学生の使用状況や反応を把握し評価していく。

視聴覚教材に関しては、故障の際には修理だし、授業に影響が出ないように調整している。視聴覚教材が実習室でも使用できるように整備していく。インターネットもWiFiが拡大したことにより活用しやすい環境を整えている。電子書籍に関しては、学生が利用しやすいように整備しているため、活用状況の推移を見ていく。

7 学生の受け入れ (3.8点)

石川県内の高校を対象とした推薦入試2年目である。推薦、一般をあわせて応募者数に減少はない。高校訪問、高校教師進路説明会をはじめ、オープンキャンパス、病院祭など広報活動を引き続き行い、学校の魅力を伝え続け応募者の確保をしていく。入学者の質的保障においては、入学前に基礎学力を確認し、結果をもとに学生個々に応じた支援を実施していく。臨地で手厚い指導を要する学生など多様な学生状況に応じた指導もより必要となってきた。

8 卒業生の状況 (3.9点)

3年次は、実習をしながらの就職活動であり、試験結果をタイムリーに把握できないこともある。不合格者に対して速やかに相談にのるような体制を整える。卒業生の情報として、申請書類により離職者を把握することもある。卒業生のフォローアップの検討も必要である。次年度は、卒業生に対しての学校への里帰りできる機会としてのホームカミングディを設ける予定である。学生の看護実践能力を把握しながら、進路指導にも生かしているが、期待する卒業生像と臨床評価にずれもある。看護部との情報共有も活用し、状況把握を行っていく。

国家試験の合格に向けての対策は、学生の特性を分類し教育活動に活かしている。

9 社会への貢献 (3.8点)

公開講座や学校祭では、参加者にアンケートをとることでニーズを把握・対応した。今後も実施する。より図書室が活用されるように母体病院の各病棟に対して図書貸出しが可能であることを周知していく必要がある。

10 研究・研修活動 (3.5点)

研究助成費を活用しながら、各教員の年間計画に基づき、研修活動等は実施されている。研究活動日についても計画的な取得を推進する。各専門領域におけるセミナー等への参加もしているため、教員間で知見を共有できるよう、伝達講義を教員会議で実施されている。大学の講師の支援を受けながらの実践報告や、大学院での研究内容の発表もなされており、より質を高めた研究に取り組んでいる。今年度は、国立病院総合医学会が東海北陸での開催にて、学生の発表とともに、教員の発表も増えた。今後、ケーススタディでの学生指導力も高め、自己の研究活動にも反映できる努力が必要である。

教育関連への学会参加、所属、演題登録を推奨し、よりいっそう、結果につながる教育実践や病院との協働の研究活動となるようつとめる。

11 学校評価 (4.0点)

計画に則り、前期に中間評価をし、後期に年度評価をしている。

学校間相互評価は実施しなかったが、学校関係者評価委員会を立ち上げ、多面的に評価、検討していく。